

沖

俳句雑誌[おき]

11月号

沖 発行所

龍島正次さんを悼む

稲子磨

能村 研三

川越しに夜業のピルの向かひ合ふ

心にも稲穂うねりの威を貰ふ

糸口が欲しと高きに登るかな

冒険の足りなき日々や草風

龍島正次さんが亡くなった。龍島さんは、平成九年に詩人の宗左近さんと一緒に「市川市民文化賞」を創設した。これは行政が市民を顕彰するものでなく、市民の手で顕彰するものでなく、市民の手で浄財を集め、市民の手で顕彰する制度で、全国から注目を集めた。その第一回の受賞者は先師能村登四郎であった。登四郎は全国的な俳句の賞はいくつか貰っていたが、自分の住んでいる地域から賞をいただくことに大変喜んだ。この賞の趣旨は「私たちは、市川出身あるいは市川に住んで、日本や世界の文化のために活躍している人に光をあて、市民と共に顕彰するため、市川市民文化賞」を設ける。私たちは、これを誇りとする。これによって文化に対する市民の意識がさらに高まり、私たちの住む街・市川の未来が輝かしいものであることを願って創設する。」というものであった。この賞をもとに「春ひとり」の句碑が建立された。「沖」からは第五回に翔先生が、また奨励賞には湖上千津さんも受賞されており、これまでに、さだまさし、山本夏彦、井上ひさし、葉山修平、宗左近など錚々たる方々が授賞している。

ところで、龍島さんは地元の信用金庫の理事長を務めたから市川の歴史・文化継承運動のリーダーと

御 御 足 を 挽 ぎ て 候 稲 子 磨

分 流 界 こ と に 秋 草 豊 か な り

時 間 差 の 研 返 し や 威 銃

渦 巻 く を 神 に 崇 め て 蛇 穴 に

露 け し や 羽 毛 を と ど む 蛇 籠 目 地

朝 寒 の 誤 報 謝 罪 は 二 行 な り

して活躍された。

肥島さんと最初にお会いしたのは二十五、六年前で真間の桜土手を「文学の道」にしたいたので、是非父の銘板を一基建てたいとのことで訪ねて来られた。この銘板は現在新しいものに替えられたが十五基の一つは、市川の文学者の一人として父の遺業が顕彰されている。その他にも国道から真間山弘法寺に至る「万葉の道」の万葉歌の書家による揮毫パネルを作ったり、夏の「手児奈はおづき市」「灯笼流し」秋の「手児奈まつり」などを次々と発案して立ち上げられ、いずれの事業も現在では多くの市民の皆さんにすっかり定着し、親しまれるものになっている。

「沖」の記念会にも何度か来賓としてお見えいただいたこともある。平成十三年には民間人としては初めて「市川市文化振興財団」の理事長に就任され、私も数年間直接のご指導をいただいた。

肥島さんは栄華富貴を願うことなく、大正人としての気骨の人であった。ご冥福を心よりお祈りしたい。

能村 研三

蒼茫集



早 風

遠藤真砂明

風は真南沖網の仕掛どき
まんばうに太平洋の早風
おのれ一喝遠泳の渚蹴る
D 51の突進釣瓶落しかな
幸先がよし出漁のいなびかり
穂芒が触れて太平洋眩し

鷹の爪

森岡正作

一叢は思はぬところ曼珠沙華
稲光明治の梁の蘇る
威銃高鳴る峽のがらんど
鷹の爪戸口に吊し滅びゆく
無花果のひよつとこ顔の熟れ残る
ふいと寄る風の抱きぐせ酔芙蓉

胎 内

安居正浩

一湾の胎内に鳥渡りけり
身を細くして行き交ひぬ萩の寺
応分の協力もして在祭
実験室裏に死神・残る虫
大文字消えてあの世の闇になる
横坐りしてゐる人に萩の風

どこまでも途中

北川英子

うたた寝のページ繰る風夜の秋
僧拭き上げし新涼の長廊下
なんとなく情報外にゐて涼し
露の世の道どこまでも途中なり
ふり返る行人坂の秋入日
竜淵に潜むに水位覚束無

あかときの月

辻美奈子

葬を待つ死者の静けさ虫すだく
ほんたうの空つぼがあり蟬の殻
あかときの月透けてをり身罷れり
とむらひのちの刈田の匂ひかな
朝顔やわが身に透くる水の色
いちじくに花隠りゐる中有かな

パズル

千田百里

ロゼワイン提げて月夜の男客
野分だつグラドピアノは帆を立てて
厄日過ぐ生茶ボトルを持ち歩き
竜淵に潜む夜夫はパズル解く
第三の人生は今きぬかつぎ
身に沁むや砂利踏みゆけば頭に韻き

水 平

荒井千佐代

聖域に水打ち霊柩車を迎ふ
水平に柩入堂かこの百合

涼しかりけり死に方を論ずれば
びつしりと舳綱へつなに藻草良夜なり
人幅の蟹の路地にも芋嵐
無蓋車に豚のひしめく草の花

瓢箪

広渡敬雄

瓢箪のふたつ並びておもしろき
みづうみは器であらめ鴨渡る
陵のまへの箒目冬に入る
白樺の向かう白樺綿虫来
囀より小さき鳥の来りけり
ガーゼ干す鉢のアロエや日短か

風 聞

千田 敬

水澄みて風が妬心の皺寄する
栗の虫博多山笠二句東京に来て貌だして
風聞おそろしななかまどが火元
うさぎ波遠見に秋の籐寝椅子
雲破れて名月捕ふ生簀かな
笑ひ話も悼みのひとつ温め酒

吊 皮 菅谷たけし

雲の峰篋で絵具を盛りしやう
渡御に蹴く笑みし遺影の地井武男
秋暑し持つて回れる奉加帳
吊皮に身をゆだねぬる敗戦日
月下美人の我儘に夜を更かしけり
一鍬に小躍りをして落し水

萩 括る 宮内とし子

一人住み決めしこの家萩括る
労りの言葉を選ぶ盆の月
反古捨つる紙の音にも夜の秋
良夜なりチェロより小さき老楽師
流れ星カケテルグラスの青き泡
惜別や天使のやうに小鳥来て

上書き保存 杉本 光祥

背泳ぎの水に抱かれてゐるごとし
秋暑し 目黒寺町坂の街
さやけしや五百羅漢と向き合ひて
夏休み上書き保存して終はる

魚 曆 成宮紀代子

秋騒雨陣屋跡へと逃げ込めり
万華鏡きらきら秋を引き寄せて
八朔の花街に買ふ棕相たはし
からす瓜引くや仏事の立て込みて
環多き遺品の箆筒ちちろ鳴く
盆波の皺敷きつめり鳩の海
矢のごとく束ねて葉つき生姜かな
江戸川の土手に葉月の魚曆

起し絵本 秋葉雅治

山に嶮海に瀬戸ある厄日かな
虫の夜にもどす熱気の画像消し
直美さん悼む子熊の起し絵に
あかつきに挑む郡上の踊下駄
竜淵に潜み土より兵馬俑
浅草の終の映画館閉づ秋思かな

桐一葉 鈴木良戈

累代の墓地より仰ぐ雲の峯
これからの計れぬ余生桐一葉
灯を入れて命あかりや絵灯籠

茗荷の子見つけし朝の茜時
潮の香の本所二の橋秋日濃く
また妻の悪寒発熱夕野分

かはほり

大畑善昭

かはほりや幹の片側まだ火照り
沼底の罅の亀甲秋ひでり
涼しさを眼に逆光を戻る馬
秋の蚊の陣に入りたる腫れ目蓋
くさじらみ馬頭観音おろがめば
国引きの諍ひいかに鯛雲

輪唱

上谷昌憲

寄席跳ねて西日の上野広小路
黙禱や酣となる蟬しぐれ
立秋の拝殿に米こぼれをり
ふるさとの一穢だになき雲の峰
鳴ききつてまだ余力ある油蟬
かなかなの輪唱移る目覚めかな

葛飾野

河口仁志

ちぎれ雲飛び秋めきぬ葛飾野
橋越ゆるバックミラーに野分雲

杖頼るわが身ほとりの素風かな
知り尽す川の流速秋つばめ
萩すすき一茶ゆかりの双樹庵
蓑虫や一茶の句碑は北向きに

露

洲上千津

草の露万霊覚むる四方静か
天の川神注波名橋詩の橋架けて逝かれけり
漂流瓦礫の遥かな旅路雁渡し
バリアー越ゆるリハビリ信ず椿実
露けしや手直し多き終の家
ウインカーのウインク右へ凌霄花

流離

湯橋喜美

秋草の黄を尽しをり湖の照り
秋口の日緋ゆるる山毛櫸林
子守唄とうに尽きをりちちろ鳴く
熊除けの鐘三つ打つ旅ごころ
雲にまだ湧く力あり鳥威し
葛の上葛這ひ流離始めかな

潮鳴集

帰 燕

井原美鳥

涼新た川に木の影橋のかげ
コンソメに金の漣星合ふ夜
辻直美逝く高々と洲の帰燕
頼杖にかなふ小窓や小鳥来る
厄日けふノイズをひろふカーラジオ

サラダボール

栗原公子

幼き日の吾知る人とある良夜
明日という未知にかかりし秋の虹
青空を沈めて水の澄みにけり
秋涼しサラダボールを木に変へて
さくと食む厚きトースト風は秋

通り雨

甲州千草

突貫工事らしき蜘蛛の困陣屋跡
万華鏡の中まで秋の通り雨
玉砂利の雨に明るき昼ちちろ
有ると言ふ無いやうな柵秋桜
山積の書籍の起伏残暑なほ

二十六穴

辻前富美枝

天平の釘の複製鳥渡る
紙端に二十六穴秋気満つ
ひぐらしの森に分け入り少し老ゆ
シネマ出て誰かに押さる雨月かな
さやけしや子供の歌ふ「シャンゼリゼ」



沖作品



能村研三選

磴百段浜へ一氣に大神輿

朱鷺・狼・日本獺浮いてこい

冷つこいとさざめく夜の海女祭

弓稽古汗の仕舞の礼深く

爆と曝暴を尽して夏の果

仏飯を待つや秋暑の雀どち

色鳥や今も小鳥の名を知らず

山城の井戸の暗さやつくつくし

城跡に今はの際の秋の蟬

抜け道も近道も無し芒原

淡泊を美学に生きて涼新た

秋雷に山ごと吞まれ旅の宿

二世帯に玄関ふたつ赤とんぼ

切り替へのできぬ不器用秋暑し

初嵐清貧の語の遥かなり

千葉

石崎 和夫

静岡

東 良子

市川市

須山 登

露座如来椎の青葉を天蓋に

敗戦日近しすつくと昆陽碑

鈴掛の千の実を振る秋夜かな

逝きし皆笑まふビデオや盆の月

稲びかり赤城は広き裾野見せ

標高の千の信濃も豊の秋

八方の空青々と林檎剥く

帰燕かな空に自由があるかぎり

中座するその潮時や瀬祭忌

鯛雲あたまは海に潜りけり

アームをすり抜けて来し流れ星

星飛んでふと口ずさむカンツォーネ

ダンヒルの煙の先の星月夜

見れば微笑む遺影の妣よ露の玉

空蟬の大池のいろを宿しをり

千葉

荒井千瑳子

浅野 吉弘

市川市

町山 公孝

沖作品 15句選評

*
能村研三

朱鷺・狼・日本獺 浮いてこい 石崎 和夫

「朱鷺」「狼」「日本獺」と言うと、ここ百年ほどで、日本から姿を消してしまつた絶滅種動物である。なぜこんなことになつたのかを推察してみると、その原因の殆どは人間がつくつていると言われている。肉や毛皮、羽毛、角や象牙などをとるために、多くの野生動物が殺されてきた。さらには自然環境の破壊により生態系が変化してしまつたことも大きな原因だ。どのような原因があるかを知り、人間一人ひとりが野生動物を保護するために何ができるか、考えていかなくてはならない。そんな気持ちをこめて作者は「浮いてこい」という季語を下五に据えた。

抜け道も 近道も 無し 芒原 東 良子
抜け道や近道など、正規のルートの道よりショートカットし

て少しでも時間を短縮することが現代人の常識になっている。忙しい世の中である。しかし日本には「急がば廻れ」という諺もある。少しの近道で得をしたように思つても結局はリスクを負つてしまうこともある。芒原という箱根の仙石原が目に見える礎となり、多数の茎が群がって大きな株となり、頑丈な根を多数周囲に伸ばす。芒原には抜け道や近道は出来るはずもない。

淡泊を 美学に 生きて 涼新た 須山 登

須山さんは、書をなさる方であるが、日本の伝統芸術は茶道に代表されるように、「わび、さびの世界」が醸し出す独特の雰囲気や境地がある。これは俳句にも通じることで、閑寂、清澄の世界と言うか枯淡の境地は日本人の持つ独特の美学でもある。季節の中でも、秋は人間の心を一番淡泊な気持ちにしてくれる時でもある。

露座 如来 椎の 青葉を 天蓋に 荒井千瑳子

八月の東京例会の目黒吟行での収穫作品。目黒不動尊本堂の裏に、露座の大日如来像が安置されている。当日は時折にわか雨が降る中での吟行であったが、本堂の裏に回つてこの如来像を拝見した。その如来像の光背をつかさどるように大きな椎の樹の青葉が覆っていた。突然眼前に現れた如来像をすかさず捉えて一句にした表現力に感心した。(以下略)